

# 特集1 第1回 CCSカンファレンス in ミュンヘン

## SPECIAL 1 The City, Culture, and Society (CCS) Conference in Munich

2010年2月25日(木)から2月27日(土)、都市研究プラザはミュンヘン大学日本センター(以下LMU)と共催で「Creating Cities: Culture, Space, and Sustainability」と題するカンファレンスを開催した(会場:IBZ、助成:国際交流基金、大阪市立大学、バイエルン州社会省、ミュンヘン大学協会、ミュンヘン大学機働会均等官)。この契機は2年前に遡る。2008年3月、エヴァリン・シュルツ氏(LMU教授)と岡野浩(都市研究プラザ副所長)が国際ワークショップをミュンヘンで開催。その後も継続して意見交換を行い、また、ワークショップの記録をURPドキュメント7号として刊行するための協働作業を積み重ねてきた。そうした交流の成果の一つとして、本カンファレンスは開催されたのである。

主な目的は2つあって、①グローバリゼーションの進展によって都市にもたらされた様々な課題をどのように解決していくか、学際的議論の中からヒントを見出そうとすること、②国際ジャーナル『City, Culture and Society (CCS)』のすぐれた書き手と論文の発掘、であった。

### ■創造都市論をめぐる白熱した議論

3日間にわたるプログラムには、18人の研究者が招聘され、約60人が参加者として世界各地から集まった。都市研究プラザからは佐々木雅幸所長、岡野浩副所長、堀口(特任講師)、川井田(特任講師)が参加し、佐々木と岡野は研究発表も行った。構成は、一人が発表した後に参加者全員で議論するというもので、積極的な質問が相次いだ。日本からは小林真理氏(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)と野田学氏(明治大学文学部教授)も参加。小林氏は「Have the Local Authorities Created the Creative City?」というテーマで、日本とドイツの70年代以降の文化政策の比較を行い、地方自治体の役割を論じた。野田氏は「Seen from a Distance」と題し、東京・渋谷が戦後の消費社会でどう変化したかを、2つの現代演劇を通じて分析した。

「創造都市」を正面から論じたのは、クラウス・クンツマン氏(ドルトムント大学名誉教授)と佐々木である。クンツマン氏はヨーロッパでいち早くcreative cityの概念を提起し、研究を重ねてきた。佐々木は80年代半ばから金沢市で経済界や市民と協働しながら政策提言を行い、その経験から日本で



カンファレンス会場の入口

最初に創造都市を紹介し、今も理論と実践を架橋している。カンファレンスでは「Networking and Cultural Diversity of Creative Cities」と題し、2004年からユネスコが創造都市ネットワークの構築を開始した背景として、文化多様性と社会的包摂との関連を論じた。クンツマン氏は「The Creative City Fever」というテーマで、創造都市は何をもって定義されるのか、もっとも創造的な都市はどこかなど刺激的な問いを次々と繰り返した。そして、「Creative City」は政策立案の際、あらゆる分野に適合する便利な言葉であるため、その都市の状況と乖離してしまっただけで「mayfly(カゲロウ)」に成りかねないが、「創造都市をめざすことは様々な分野の政策を統合し“creative governance(創造的統治)”を生み出す好機になる」「創造都市というパラダイムは金融危機から回復する希望になりえる」と述べた。両者に共通するのは、新自由主義的な解釈のもとでの創造都市論(高い創造性とスキルをもった人々を誘致して都市の活性化を図るなど)ではなく、それぞれの地域の実情を読み解き、社会的弱者と呼ばれる人々をエンパワメントして創造性を発揮できる環境や制度のあり方を重視している点である。

### ■Presenters & Chairman

Sonja BEECK (Bauhaus Dessau, Germany)  
 Brett CHRISTOPHERS (University of Uppsala, Sweden)  
 Eveline DÜRR (LMU, Germany)  
 Irene GÖTZ (LMU, Germany)  
 H. Detlef KAMMEIER (Bangkok)  
 Roger KEIL (York University, Toronto)  
 Mari KOBAYASHI (Tokyo University)  
 Klaus R. KUNZMANN (Potsdam, Germany)  
 Ute LEHRER (York University, Toronto)  
 Nicolas LEWIS (The University of Auckland)  
 Ana ROSAS MANTECÓN (Universidad Autónoma Metropolitana, México)  
 Manabu NODA (Meiji University)  
 Glen NORCLIFFE (York University, Toronto)  
 Hiroshi OKANO (URP, Osaka City University)  
 Masayuki SASAKI (URP, Osaka City University)  
 Evelyn SCHULZ (LMU, Germany)  
 Lidewij TUMMERS (TU Delft, The Netherlands)  
 Kôji UEDA (Japan Foundation, Cologne)  
 Klaus VOLLMER (LMU, Germany)  
 Franz WALDENBERGER (LMU, Germany)  
 Paul WALEY (University of Leeds, UK)  
 Gordon WINDER (LMU, Germany)  
 Henry YEUNG (National University Singapore)

## ■ CCSの射程と参加者の共感

CCS刊行の目的は、グローバリゼーションがもたらした地球規模の問題に対して、新たなシステムを長期的展望のもとに都市論として全世界に提起することであり、CCSでは、コミュニティ、都市の再構築のための手段として文化(特にアート)的創造力に着目している。アートは境界を越えて人々を結ぶ力をもっており、格差や排除をなくそうとする人類の本質的希求に対して、社会包摂のための極めて有効な方策となり得る。したがって、CCSが確立を目指している新たな都市論とは「社会包摂型創造都市論」であり、CCSは次のような機能を果たすことで、都市論のさらなる進展を図る。

1. 「社会包摂型創造都市論」などの先端的都市論の彫琢のためのグローバルなプラットフォームの形成
2. 「文化創造を媒介にした社会包摂」を都市論の中心に置き、コミュニティに向き合ったアートマネジメントや都市文化政策、文化政策と福祉政策の融合、共助のシステムを内包した都市ガバナンスのあり方など、創造的都市空間の構築に向けた理論と政策課題の研究
3. 従来のような欧米起源の都市論(の受容)ではなく、開発主義と権威主義的行政から急速に変容しつつあるアジアの都市の分析に重点を置きながら、世界的な都市政策課題を明らかにする。

本カンファレンスはCCSのめざす射程に基づいて開催され、参加者はその志に大きな賛意を示した。3日間の議論で刊行の意義がさらに伝わり、多くの研究者が論文投稿を申し入れてくれた。これらの成果は、URPドキュメントやCCSの特集として近い将来公表する計画である。

## ■レセプションでの総領事からのメッセージ

26日の夜は、在ミュンヘン日本国総領事館で歓迎レセプションが開催された。小菅淳一氏(総領事)と鈴木康熙氏(副領事)らがあたたかく出迎えてくださり、なごやかな雰囲気のもと、参加者同士の交流も深まった。小菅氏は、ドイツにおける都市研究プラザの活動を独立行政法人理化学研究所(日本で唯一の自然科学の総合研究所)とマックス・プランク協会(ドイツを代表する学術研究機関)との提携と同レベルの重要な学術交流であると捉えてくださった。さらに小菅氏は、カンファレンスの継続開催とともに、都市研究プラザとLMUの提携関係のさらなる深化を望むとも述べられ、身の引き締まる思いであった。

- 川井田祥子(都市研究プラザ特任講師)
- 堀口 朋亨(都市研究プラザ特任講師)



レセプションにて(右が小菅総領事)



カンファレンス会場の風景

From February 25<sup>th</sup> (Thu.) through the 27<sup>th</sup> (Sat.), 2010, the Urban Research Plaza and the Japan Center of the Ludwig-Maximilians University (LMU) of Munich jointly held a conference titled "Creating Cities: Culture, Space, and Sustainability," at the International Center for Science and the Humanities (IBZ) in Munich. It was sponsored by the Japan Foundation, Osaka City University, State Ministry for Social Affairs of Bavaria, Münchener Universitätsgesellschaft, Equal Opportunities Officer of LMU Munich.

The main goals were: 1) from an interdisciplinary discussion, to spotlight hints for solving the various problems brought about by the ongoing progress of globalization in cities, and 2) to provide exposure for the excellent authors and articles of the international journal *City, Culture, and Society* (CCS).

18 researchers were invited to make presentations and approximately 60 people from around the world participated in the program which extended over three days. The participants expressed their support for the objective of the journal CCS, which is the affirmation of the idea of 'socially inclusive creative cities.' Through the three days of discussions, this intention was further clarified, and many researchers agreed to contribute articles to CCS. Publication of the results of the discussions, as URP documents and in a special issue of CCS, is planned for the near future.

There was also a reception held on the night of the 26<sup>th</sup> at the Japanese Consulate-General in Munich. Mr. Kosuge Junichi, the Consul General, said that the activities of the Urban Research Plaza in Germany were an important scholarly exchange, and expressed his hopes that the conference would continue to be held annually and that the relationships of collaboration would deepen further.